

熊谷地域労働者福祉協議会  
地域社会研究会

# 地域社会研究論集 1

【研究論文1】

「協同」思想の系譜と市民社会運動  
—協同組合の構想とキリスト教社会主義の源流をめぐって—

山下祐樹

2015

熊谷地域労働者福祉協議会・地域社会研究会

## 「協同」思想の系譜と市民社会運動

—協同組合の構想とキリスト教社会主義の源流をめぐって—

"Cooperation" the genealogy of the thought and civil society movement  
-Concerning the plan of the cooperative society and a source of Christian socialism-.

2015

山下祐樹

(熊谷地域労働者福祉協議会)



「協同」思想の系譜と市民社会運動  
—協同組合の構想とキリスト教社会主義の源流をめぐって—

目 次

序論	・・・	2
第1節 協同組合の構想と展開		
—松村善四郎・中川雄一郎『協同組合の思想と理論』の視点	・・・	3
第1項 協同組合思想の概念		
第2項 オウエン前史・プロックホイの協同思想		
第3項 オウエンと生活空間		
第4項 イギリス協同組合運動の創始		
第5項 ロッチデール公正先駆者組合の形成		
第2節 キリスト教社会主義の「協同」思想		
—中川雄一郎『キリスト教社会主義と協同組合』の視点	・・・	13
第1項 キリスト教社会主義者の誕生とモーリス		
第2項 キリスト教会改革運動とラドロー		
第3項 協同組合運動とニール		
参考文献・出典引用	・・・	18

## 序論

コーヒーハウスとは、17世紀の後半以降、イギリスの市民階級の集うクラブ・ハウスのことを意味している。イギリスにコーヒーが輸入され、1650年には、第一号のコーヒーハウスがオックスフォードにつくられ、1699年にはロンドンだけでも2000以上のコーヒーハウスが軒を並べた<sup>(1)</sup>。そのほか、ケンブリッジ、ブリストル、プリマウス、チェスター、シェフィールド、エジンバラ、グラスゴーなどにもコーヒーハウスが展開していた<sup>(2)</sup>。コーヒーハウスにおいて、人々はコーヒーを飲み、集まった人々は互いに雑談し、政治・宗教・文学・科学に関する議論も行った<sup>(3)</sup>。

コーヒーハウスでは、お金を払いさえすれば、誰でも、身分に関係なくナイトであろうと平民であろうと、主教であろうと牧師補であろうと、富める商人であろうと貧しい徒弟であろうと、空いている席に自由にすわって、誰とでも話すことができ、どのような討論にも加わることであり<sup>(4)</sup>、コーヒーハウスを描写した表現によると、「コーヒーハウスはあらゆる種類の人を、富める人も貧しい人も、教養のある人もない人も、みんな社交的にしてしまう。コーヒーハウスは芸術を、商品を、そしてその他すべての知識を進歩させる。なぜなら、そこには、好奇心の強い人々が最初から勉強してやろうというつもりで集まってきていて、本で読めば一ヶ月もかかりそうなところをひと晩でものにしてしまうのだから。彼は、自分が知りたいと思っている問題に造詣の深い人々がしばしば集まりそうなコーヒーハウスを探して行くこともできるし、他の人が読んだり研究したりしたことのエッセンスだけを、短い時間で吸収したり、容易にその水準にまで到達したりすることもできるのである」<sup>(5)</sup>という状況であった。

このように、コーヒーハウスは、極めて近代的であり民主的な文化機関であった。文化機関とは、コーヒーハウスに出入り人々における知識と教養の源泉であり、新興市民階級にとっての知識と教養の源泉としての近代的、民主的機関でもあった<sup>(6)</sup>。

しかし、名誉革命を前後し、そのようなコーヒーハウスの状況が変化した。この時期は市民革命後の市民社会への大きな関心が生み出される傾向があった。市民社会についての様々な議論と同時に、市民階級が社交の中心を担う状況へと変化し、すなわちコーヒーハウスも変化を余儀なくされたのであった。例えば、席が指定制となり、市民の政治活動の拠点としての特色を持ち始めたのである<sup>(7)</sup>。このことは、安価なコーヒー代を払いさえすれば自由に様々な議論に参加でき、情報を共有し、それら生活の糧にするという利点を共有していた下層階級の人々が締め出されたということの意味する。まさにコーヒーハウスという共同体が崩壊し、人々の一部が隔離されるという状況がそこから見出されるのである。

このコーヒーハウスの変遷は市民社会批判の系譜と共通するものがある。つまり、コーヒーハウスという民主的な場所を失った人々の心理的側面と、協同組合、社会福祉、社会教育への希求という人々の関心は通底するものがあるように筆者は捉えている。以上序論として示したような一思考を前提にして、本節では特に協同組合に着眼点を置き、その運動的特質について概観したい。なお、第1節においては、協同組合の思想性に関しての的確な知識内容を得られる、松村善四郎・中川雄一郎著『協同組合の思想と理論』に依拠しながら、オウエン前史を含めて、近代における協同組合思想の成立過程について論じていく。そこにおいて、特に注目するのはイギリスにおける協同組合思想の系譜である。第2節においては、中川雄一郎『キリスト教社会主義と協同組合』を参照し、協同思想の展開に関わるもう一つの原点とも言えるキリスト教社会主義の展開について着目する。

## 第1節 協同組合の構想と展開—松村善四郎・中川雄一郎『協同組合の思想と理論』精読から

### 第1項 協同組合思想の概念

市民社会に対する実践の「運動」として、協同組合を再認識することは有用である。また、実践的要素を捉える時、協同組合思想に対する理解を前提とすることが肝要である。この思想的背景について通史的に概観し、協同組合の概念を再認識することが本節の目的とも言えよう。松村善四郎・中川雄一郎『協同組合の思想と理論』は協同組合の意味についての以下のような解説がその冒頭に置かれている。

協同組合思想は、一般に、近代資本主義の確立過程で生じた社会経済的・産業的激変—産業革命—が生み出した諸々の事態に対応して形成された社会思想の一つであり、「共同の生活」や「共同の生産と消費」という理想を掲げた労働者階級が協同組合組織を通じて実現しようとした理念である、と言えよう。そしてその理念に基づいて、自らの理想の実現のための運動を構成し促進して、一定の歴史的、社会的役割を果たしたのである。

しかしながら、社会思想としての協同組合思想は、ある特定の社会の変化や発展のなかから直接的、無媒介的に生みだされたものではない。社会思想は、何よりも「体系としての思想」である。過去の歴史の過程で生まれてきた様々な思想が滋養となって各々の時代の思想として開花し、当面する事態に対応すべき指針を提示するのである。その意味で、協同組合思想はそれが形成され展開される以前に生み出された様々な「協同」を原理とする思想を媒介に再編されて大衆的基盤の上に新しい社会的理念として定着していった思想である、とも言えよう<sup>①</sup>。

そして、協同組合思想による「当面する事態への対応」という表現は歴史の一定の段階で生み出された矛盾—経済的、社会的秩序と現実の生活との間に生じたギャップ—を人々が克服するために展開された運動、として認識される<sup>②</sup>。すなわち、「イギリスにおいては、それは、産業革命の進展によって確立し発展していった資本主義的商品生産が一方で商品経済によって疎外され、他方でその同じ商品経済にますます引き込まれていく労働者を階級として作りあげ、そしてその結果、その同じ労働者階級が「協同」を原理とする社会を、協同組合組織を基礎に建設しようとする経済的、社会的運動であった、と。とはいえ、かかる経済的、社会的運動の理念としての協同組合思想が真に大衆的な基盤の上に展開されるにはロバート・オウエンの出現を待たなければならなかったのである」<sup>③</sup>。

いわゆるこの点について同じく考察したオウエンを以って、市民社会批判の系譜が協同組合思想へと繋がる事が分かる。

### 第2項 オウエン前史・プロックホイの協同思想

『協同組合の思想と理論』においてオウエン前史の嚆矢としてオランダ人P・C・プロックホイ(Peter Cornelis Plokhoy)を挙げている。彼は1659年に『様々な国の貧民を幸福にするための一方法』(A Way Propounded to Make the poor in these and other Nations happy)を著わした。当時における王政復古の余波は、大地主の利益を保証しつつ、土地所有の近代化を促したが、しかし他方では、農業労働者やその他の下層階級の状態を悪化させていたとされる<sup>④</sup>。プロックホイはこのような「市民戦争と共和制時代の社会的動揺の経験に刺激されて、社会改革の理想を抱く」ようになった。彼は元来、宗教問題に大きな関心をもっていたが、この『一方法』では、キリスト教的精神を高唱したものの宗教問題にはほとんど触れずに、「小共和国」における救済制度を論じている<sup>⑤</sup>。

プロックホイ『一方法』における提案は、どうすれば貧民に仕事を与え、その国全体の福祉を高め得

るか、ということであった。彼は、当時の最大の社会的弊害は貧民の失業であり、またその結果としての貧困と社会的不平等であるとされ、「失業の問題を解決することなしには社会一般の福祉の向上はありえない」という理念が根本に置かれた<sup>(6)</sup>。

プロックホイの協同思想について、『協同組合の思想と理論』の著者、中川は以下のように纏めている。「このように極めて現実的であり、そのために完全な国家や共同体といった観点からの提案として表現されない。むしろ彼の協同思想は「部分的な解決」を提示しているものであると言ってよい。というのは、彼は、当時大きな力をもっていたオランダ経済を熟知しており、そのオランダ経済の発展がオランダの「福祉の増大」を導いた事実に基づいていたので、「失業の問題」と「経済力の増大」とを容易に結びつけてしまったからである」<sup>(7)</sup>。

加えて、プロックホイはまた、「経済力の増大」を「大規模な企業」と同一視し、「小共和国」＝共同体を農業、工業および商業を結合した一つの企業として描いて、理想の「小共和国」を提示したとされる<sup>(8)</sup>。中川は以下のように具体的に説明している。

その小共和国という形をとる共同体によって、農業、工業および商業の有機的結合に基づく大規模な経済単位を形成し、それによって外部の他の企業との競争に勝ち、生活必需品の価格を引下げて市場に対して大きな影響力をもつようになり、かくして組合員の生活水準を上げることが可能になるというものである。また彼は、共同生活による家事労働の節約とその結果としての生産活動への女性の参加、生活必需品の大量共同購入による節約＝(中間利潤の排除)といった共同生活がもたらす利益を強調している。<sup>(9)</sup>

その共同生活について具体的に示すと、組合員としてこの共同体に参加するには一定の資金を拠出するか不動産を提供しなければならない。ここを脱退する場合には「利潤を加算した自己の財産」を返済してもらえ。共同体を運営していくために、三人の管理者が毎年選挙される(再選は許される)。他に若干の監督者も選挙される。一年かあるいは半年毎に財政報告がなされ、利潤は組合員の間で分配される。非組合員が雇用される可能性は開かれているが、彼らの賃金は組合員家族に支払われる賃金と異なる。教育と医療は無料、老齢の組合員の世話は共同体によって十分になされる。労働時間は、多少の変化はあるが、組合員の場合は一日6時間、非組合員の場合はその倍の時間である。共同体は都市と農村に各々倉庫として役立つ大きな建物を設置する。都市の建物は生活必需品の店舗をもち、20から30家族を収容する。農村の建物は河川の近辺に設置され、生産の中枢部を成す。という小共和国を構想している。<sup>(10)</sup>

プロックホイの想定は多くの空想的な側面を持ち合わせながらも、ここに見るように具体的な構想も含まれ、現実性のある内容であったように考えられる。そして内容は、以降の協同組合思想に見られる「コミュニティ」の構想にも影響を与えたことが分かる。

続いて、イギリス協同思想が強烈な体制批判を展開したのは、マルクスが「経済学史上の真の奇才」と称したジョン・ベラーズ(John Bellers)においてであった。彼は1695年に『産業学校建設の提案』(Proposal for raising a College of Industry)を著わし、その中で次のようなモットーを説いた。それは「勤労は繁栄をもたらす。怠惰なる者はボロをまとえ。働かざる者食うべからず」<sup>(11)</sup>であり、「仕事の無い貧民は磨かれないままのダイヤモンドであり、その価値は未知である。人民のいない土地は何の価値もないが、それと反対に、規則正しく労働する人民は王国の最大の宝であり強みである」<sup>(12)</sup>と表現している。これは労働者がいなければ貴族もありえないからであり、またもし貧しい労働者が自らを維持する以上の食糧や製品をつくりださないとすれば、すべての貴族は労働者にならなければならないし、

すべての怠惰な者は餓死するしかないからであるとされる<sup>(13)</sup>。

ベラーズの信念は彼の思想を端的に表現しているとされる。彼が貧民に大きな関心を寄せた動機は、貴族を貴族として存続させるには貧民の適当な労働が必要であり、それによって国家的利益が確保されるのであると考えられるが、実際は、当時の国家的政策であった重商主義政策に対する批判を彼が展開するためであったとされる<sup>(14)</sup>。すなわち、「貿易差額に基礎を置く重商主義政策に反対して、農業を中心とする諸産業間のバランスのとれた発展を主張したのも、また貨幣を排して労働を価値の尺度とすることを主張したのもそのためであった」とされている<sup>(15)</sup>。これらの理想を含意されつつ、ベラーズは具体的に以下のような試みを提言している。

ベラーズは貨幣の排除という点では徹底していた。ベラーズは「このカレッジ共同体では、貨幣ではなく労働がすべての必需品を評価する尺度となる」、「政治体にとって貨幣とは体の不自由な人の松葉杖のようなものであり、不自由でない人にはかえって松葉杖は厄介である。同じように、個人の利益が公共の利益となるとき、こういう共同体では貨幣はほとんど無用となる」と主張する。

ベラーズの「産業学校」は、ブロックホイと同じように、「市民社会の変革」を企図したものではなかったが、しかし、労働を重視し、貧民に雇用を保証することが富者の義務であり、それがまた富者に利益をもたらすという、労働者と新興の資本家との間の「調和の思想」を展開して、鋭く重商主義体制を批判した。

ベラーズの「産業学校」は次のような内容である。農業と工業と商業の各産業部門があり(農業生産を中心に行っていることは先に述べたとおりである)、失業者に住宅施設を与え、衣類、医療、老齢年金、児童教育を施し、高賃金を支払う。そして集団の努力でできる限り自給し、そのために使用可能な労働を雇用し、荒蕪地を耕作して生産力を高め、生活水準全体を上げていく。<sup>(16)</sup>

他方、ベラーズは労働と教育を結合するよう提唱し、労働それ自体が教育であると主張することによって「産業学校」を、「貧民の救済施設」としてではなく、自給自足の「労働植民地」生産共同体として「提案」することができたとされる<sup>(17)</sup>。中川は「ベラーズの協同思想は、農業生産を共同体の基礎とする点、貨幣を排除して労働を価値の尺度とする点そして労働と教育を結合する点においてロバート・オウエンの『ラナーク州への報告』を想起させる」と述べている<sup>(18)</sup>。オウエンへの影響史という点では、ベラーズにその源泉があるように思われる。

### 第3項 オウエンと生活空間

ロバート・オウエンの市民社会批判は前章において示した。ここにおけるオウエンへの眼差しは生活空間という共同体・協同体に重点を置くことにする。いわば、理想から実践への流れとして、現実的な生活空間に理想をいかに適応させるかという、採用させるかという点がまず必要となる。結局、未達成のままに終了したオウエンの実践についても、その課題が今に至っても問われ続けているといえよう。

オウエンは、生活環境改善による人間力能の開花と「ヒューマンな協同社会形成」(human Community-making)との一体的実現を目指し、不滅の示唆を今日にまで与えつづけている。オウエンが後世まで名をのこした事業である労働者の生活改革や生活環境改革にのりだすのは28歳で、1800年1月1日頃に、ニュー・ラナークの統治にとりかかった時点からである。このスコットランドの紡績工場の町は約1700名の人々から成りたっていたが、経営不振の理由として、労働者の生活が荒廃していること、その底に、「彼らの子供達が幼いときから育てている家の設備が親にも子にも殊に有害なのだ」と知った。そこで彼は、世界最初の幼稚園創設と労働者教育の実績に立って「一致と協同の村」(Village of Unity and co-operation)の創造を世に問うた。これが1814年の『新社会観』であり、ニュ

ー・ラナークで 2500 人にふくれあがった人々を管理し成功した進歩的ブルジョアジーの主張であったとされる<sup>(19)</sup>。

オウエンが紡績工場経営者として出発した 1780-90 年代のイギリスでは、産業革命が急速に進行していた。蒸気機関や新しい機械が次々に登場し、工場制手工業を近代的大工業に変え、ブルジョア社会を根底から変革しつつあった。大資本家とプロレタリアートへの社会の分裂が恐るべき勢いで進行し、かつての「中流階級」は急速に没落し不安定な生活を強いられた。都市には農村から流入した貧民たちが溢れ、家族制度など伝統的紐帯は弛み、犯罪が横行し、労働者大衆の墮落が深刻になっていた<sup>(20)</sup>。

ニュー・ラナークでの実験については、オウエン自身が自らの「性格形成論」を展開した文献、『社会に関する新見解』（1813-14 年公刊）で詳しく論じている。ニュー・ラナークでの実践は彼にとって人間は環境の産物であり、したがって環境を変えることによって人間を変えることができるという理論を実証する活動でもあったのである<sup>(21)</sup>。

この計画は、最大生産性・都市と農村の幸福な結合・労働成果の平等配分・精神労働と肉体労働の差別廃止・私益と公益の差別廃止という五つのコンセプトから立案されている。また、その実現のために、人口・面積・生活施設・管理施設・自給都市と他地域との関係・政府との関係という六つのフレームが明記されている。このコミュニティでは、共同の冷暖房施設を備えた四棟の労働者集合住宅が、花壇や遊び場や共同炊事場・共同食堂・学校・教会という施設を方形状に囲んでいる。また、連棟式共同住宅の中央には、病院やホテルなどの都市施設が用意され、その外側には、工場労働者が耕作する農地がひろがり、さらに四辺が植林でカバーされた農地の外に工場がセットされている<sup>(22)</sup>。

このコミュニティは、それぞれが協同原理に基づいて住民自治で運営される自給都市であって、農工一致・職住近接原理へのコミュニティ群から成る新社会では、地域社会の自治と安価な政府と社会主義の融合実現の基礎とされている<sup>(23)</sup>。オウエンの構想は、現代都市・農村の居住環境の非人間性、家庭基盤の弱体化からの家族崩壊に対して、彼の自給都市・地域主義の発想が、分業の廃止と人間的諸能力の開花の可能性を多く含んでいるのである。

産業革命がもたらした人間疎外現象のネガティブな側面とともに、オウエンは科学や工業のポジティブな生産力側面を見ている。当時の人口が 1100 万人であった「この帝国内における新しい機械力・化学力は、二億以上の人口の筋肉労働に代位した」<sup>(24)</sup>。この工業力が、労働者の疎外からの解放にも力を発揮すること、また労働者の居住環境改善がその必須条件であるとして、まさに良好な生活空間を重視したのである<sup>(25)</sup>。

その立場は、技術革新に対応しうる良質労働力の長期確保であったが、それから七年たって書かれた『ラナーク州に対する報告書』の内容は、彼が理想主義的社会主義者に転じたことを示している。しかも、ここで描写された農村生活と結合された労働者の生産と生活の都市空間デザインは、後の田園都市構想の源であり、実現可能なものとして、「ウーデポイア・ポリーティア」（どこにもない都市共同体・ユートピア）を超えるものであった<sup>(26)</sup>。

世界的な都市計画史家である L・ヴェネヴォロは、「このオウエンの提案は、政治経済的な前提から建物の計画、予算見積りにいたるまでのあらゆる面から検討された近代都市計画の最初のものであった」と高く評価している<sup>(27)</sup>。

ニュー・ラナークの実験により、オウエンは一躍博愛家、慈善家としてブルジョア社会でもてはやされるようになり、ニュー・ラナークはやがて「社会改良者のメッカ」と言われるようになった。しかし、彼はこの成功だけでは満足しなかった。ニュー・ラナークでできたことは社会全体でできるはずだし、また社会全体で採用しない限り、本当の意義は明らかにならないと考えたのである<sup>(28)</sup>。

オウエンの共産主義プランは、1820 年のイギリス全土を襲った恐慌後、徐々に具体的な形を取るが、それがあつた程度まとまった形を取つたのは、ニュー・ラナーク州庁に依頼されて失業の原因を分析し報

告した文書、『ラナーク州への報告』（1821年）だとされている。オウエンはこうしたプランを抱いて1824年にアメリカに渡り、「ニュー・ハーモニー協同体」の建設に乗り出すが、意見の対立や金銭上のトラブルから28年には退村を余儀なくされ、イギリスに戻る。彼がアメリカ滞在中の1826年7月4日、アメリカ建国五十年記念の日におこなった演説、「精神的独立宣言」はこの頃の彼の思想的到達点を示しているとされる<sup>(29)</sup>。彼はその中で、「悪の三位一体」として「私有財産、矛盾と不合理な宗教、それらいずれか一つとした結合した不合理な結婚制度」を挙げ、それらの「奴隷」として生きてきた人類の解放を謳ったのである<sup>(30)</sup>。

オウエンによる、当時の生活空間の悪状況に対する批判は、時代後者に受け継がれることになる、それはすなわち、ビクトリア朝の繁栄期における大都市の平均死亡年数が15-17歳であり、その原因が酷すぎる住宅・都市環境にあることを訴えたエドウィン・チャドイック(Edwin Chadwick)の『イギリスにおける労働者の衛生状態』であった<sup>(31)</sup>。これは医師チャドイックが議会の委託によって実態調査した結果、都市スラムでの惨状が1842年に公表され、為政者の危機感を触発して、1848年に「公衆衛生法」が施行され、下水道整備を始めとする都市環境整備事業が開始された。チャドイックは、労働者が十分な生活を営むに足る賃金を得ながら、ことに飲酒の悪癖で身を持ちくずし、地下室や屋根裏部屋で狭小過密でかつ不潔な居住環境のもとで、伝染病によって年若く死んでゆく労働者像を問題にしたのであった<sup>(32)</sup>。イギリスにおける労働運動には、オウエン以降のチャーティスト運動からフェビアン社会主義に至るまで、労働条件改善、平等な所得分配と並んで、住宅改善・都市改革の思想と運動が脈々と流れているといえる。

#### 第4項 イギリス協同組合運動の創始

『協同組合の思想と理論』において、イギリスの協同組合運動を歴史区分ごとに把握する論考がなされている。その区分にしたがって、イギリス協同組合運動の創始の様相について着目する。先ず、第一と第二の時期は以下のように概観されている。

第一の時期はいわゆる原生(基)的協同組合運動(あるいは初期協同組合運動)と称される時期である。それは1760年にウーリッチ(Woolwich)とチャタム(Chattham)に船大工たちによって設立された協同製粉所から1820年以降オウエン主義思想が協同組合運動の指針となる前までの、およそ60年の長きにわたる時期である。原生的協同組合運動は、食糧品の価格騰貴に対抗する労働者の自然発生的、地方分散的性格の強い運動であって、運動を導く理念あるいは思想が欠如していたために、統一的な運動を構成しえず、大多数の協同組合は「孤立した実験」に終わってしまった。<sup>(33)</sup>

次の第二の時期は、オウエンがその協同組合思想によって原生的協同組合運動に一定の方向づけを与えて、協同組合を資本主義経済体制にとって代わる社会経済的体制であることを明確に示したことによって、オウエン主義的協同組合運動(The Owentie Co-operative movement)が華々しく展開された1820年代の初めから1840年代中葉までの、およそ四半世紀にわたる時期である。この時期にあっては、協同組合共同体の建設こそが協同組合運動の企図するところであり、協同組合運動の「究極目的」であった。<sup>(34)</sup>

またこの第二の時期は、近代的協同組合運動の創始であるロッチデール公正先駆者組合を生み出す思想的、実践的基礎を用意したイギリス協同組合運動史上の重要な時期である。「オウエン＝協同組合思想の父」のもつ意義もこの点にあるのであり、以下に述べる協同経済組合とロンドン協同組合の歴史的意義についてもそのような観点から考察されるであろうし、さらに第五節で述べるウィリアム・キングの

協同組合思想もこの第二の時期の重要かつ歴史的産物であったことに留意しなければならないであろう。<sup>(35)</sup>

より詳細に見ていくと、近代的協同組合の出発点として認められる協同経済組合 (The Co-operative and Economical Society) の設立は、1821年1月22日の、オウエン主義者ジョージ・ムーディー(G・Mudie)を指導者とする印刷工の集会で決議され、翌23日に創設されたのであるが、すでにそれ以前の1820年8月に彼らは「労働階級の状態と社会全体の実質的改善を遂行する」ためにムーディーが提案した「組合計画」について検討していた。その結果、「組合計画」を採用すること、またそのために必要な建物をロンドンの便利の良い場所に建設することが決定されたということであった<sup>(36)</sup>。そしてこの決定に基づいて発表された『印刷工の集会で任命された委員会報告』は以下のように引用される。

相互協同の計画を採用した結果生じると思われる利益」のうち「金銭的利益は二つの源泉—我々の経費の節約と我々自身によって生産される新しい富—から生じるであろう。第一に、個人的な生活計画に基づいて小さな小売店で少量しか—しばしば掛け買いで—一般に得られない食糧品やその他の商品を、即金払いの卸売り価格で購入することによって生み出される節約から。第二に、料理、醸造、パン焼き、洗濯そして部屋の掃除のための用具の費用の節約から。…第三に、光熱費の節約と食物の準備から。…第四に、家事労働の分割の結果、共同体の女性によって節約される時間の価値から。節約された時間は現に我々が支払わざるをえないサービスを遂行する際に有利に使用されうるし、また使用されうるであろう。<sup>(37)</sup>

「組合計画」は、様々な形で得られる「金銭的利益」を基礎に、250家族の共同生活の確立を目指して実践に移される。そしてこの共同体は、労働者の「独立を導くための力を備える」完全な自治組織であり、また『報告』の言う第二の「金銭的利益」の源泉である「新しい富」は「土地の耕作かあるいは組合による製造業からつくりだされる富」なのであるから、生産設備・施設を所有する生産組織であるとされている<sup>(38)</sup>。成人男子の組合員が毎週1ギニー(21シリング)の拠出金によって一般基金を形成し、その基金で「一切の生活必需品と豊富な多数の生活の安楽品を共同体に供給」することから、生活共同の組織であるということが分かる<sup>(39)</sup>。つまりこれは、「『報告』が描いた組合は、生産の組織を有し、共同生活を基礎とする自律した自主管理による共同体」であるといえる<sup>(40)</sup>。以降の具体的な動向については以下に示す通りである。

1824年、協同経済組合をより発展させた形で組合がロンドン協同組合である。ロンドン協同組合は「二つの制度—個人的競争と相互協同—のメリットに関する議論」を通じて「ロンドンの50マイル以内に共同体を建設する」計画を提案した。そしてこれらの目的を達成するために、1826年1月に機関誌『協同組合雑誌』が発行された。『協同組合雑誌』は、創刊当時、ニュー・ハーモニーやオービストン共同体などの「共同体実験」の進行状況についての記述に多くを割いた。だが、ロンドン協同組合は単にこれらの実験を観察してだけでなく、自らも「ロンドンの50マイル以内に共同体を建設する」計画を立て、オウエンの援助を期待しつつ1826年に4000ポンドの資金を集めた。しかし、基金目標の50000ポンドには遠く及ばず、計画は前進しなかった。<sup>(41)</sup>

1826年7月、ロンドン協同組合に「協同組合共同体基金協会」(The Co-operative Community Found Association)が開設された。この協会は「比較的小規模な協同組合共同体を形成するための基金を集めるために、ロンドン協同組合の何人かの組合員の協力により取り結ばれた」組織である。協会は、

基金が 500 ポンドに達したならば、適当な広さの土地を賃借し、最初の農作物を栽培し、そして建物を建築するために労働者を雇用する。協会の会員はその時までには 25 ポンドを出資して土地と建物の準備を完了し、製造業と農業の結合によって安楽と繁栄の共同体を建設引翠というものである。みられるように、協会は大規模な目標ではなく、小規模な共同体建設から開始すべき方針を採っている。先に述べた 50000 ポンドの規模の共同体建設運動は少なくとも労働者の運動としては明らかに困難であったし、彼らの運動の範囲外のものであった。それよりはむしろ、小規模な共同体は「適当な時期がくれば、いつでも容易に融合し合い、それによって大規模な共同体を形成しうる」のであるから、労働者の能力の範囲内で運動を開始すべきである、としたのである。<sup>(42)</sup>

この小規模な共同体から始めるという方針について興味深い論争を見ることができる。すなわち、それは、小規模な共同体から始めるという方針は W・トンプソンをはじめ多数の指導者によって賛同されたものの、初めから大規模な共同体の建設を目指すオウエンとの対立を強めることになったという議論である<sup>(43)</sup>。ただし、「小規模な共同体から開始するという目標は、共同体建設基金を労働者自身のために、自らの力で調達しようとする意思表示であった」ということは看過できない。以降の状況について見ると、「ロンドン協同組合は、大規模な共同体の建設というオウエン流の方式が基金調達を不可能にさせることを知り、小規模な共同体の建設へと方針を変更し、そして基金を店舗経営によって蓄積する運動を展開した。ロンドン協同組合の内部では、先の補助基金のほかに共同交換組合(The United Exchange Society)も設立され、組合員労働者自らの手で共同体建設基金を獲得するという方向が定着することになった」のである<sup>(44)</sup>。そして、中川は「協同組合共同体の建設という目的とその目的を達成するための手段としての店舗経営がこうして統一されてオウエン主義的協同組合運動の特徴を示すことになるのである。ロンドン協同組合の歴史的立場は大きいと言わなければならない<sup>(45)</sup>」と評価しており、つまり、ロンドン協同組合は後世へのオウエン主義の影響の一表現であるといえる。

イギリス協同組合運動の思想面を支えた最たる人物はウィリアム・キング(William King)である。キングは「オウエン主義的協同組合運動に大きな影響を与えた。実際、彼は特に、オウエン主義的協同組合運動における店舗経営の位置づけを明確にした点で特筆される。キングは自分の協同組合思想を、彼自らが編集し発行した『協同組人』(The Co-operator)で展開し、労働者にわかりやすい言葉で協同組合の思想や理念を語りかけた」のであった<sup>(46)</sup>。

キングは『協同組人』第6号で、協同組合の「目的」と「目的を達成する方法」を次のように示したとして、『協同組合の思想と理論』における引用が見られる。すなわち、それらは「目的として、貧困に対する組合員の相互の保護。生活安楽に過すための品物のより大きな分け前の獲得。共同資本による独立の達成」。「方法として、第一に、共同資本の形成のために週6ペンス以上出資する。第二に、通常行なわれている方法とは違った方法でこの出資金を使用する。すなわち、(貯蓄銀行への)投資ではなく、取引に使用する。第三に、この出資金は、十分に蓄積されたならば、組合(員)むけの製造業に使用される。第四に、資本がさらに蓄積されたならば、それは土地の購入とその土地での共同生活のために使用される<sup>(47)</sup>」という提言である。かくよう、キングの協同組合思想の要点である協同組合共同体の思想へと繋がるのである。その内容とは中川によると以下のように概説できる。

キングは協同組合共同体の建設を提唱している。彼はすでに『協同組人』第一号で、「資本が十分に蓄積されたならば、(協同)組合は土地を購入し、組合員自らがそこで生活し、その土地を耕作しそして組合員の欲する製造品を生産し、かくして衣食住についての組合員のすべての欲求を満たしうるのである。その時には、組合は共同体 Community と呼ばれるであろう」と明言している。キングは、本来的には、協同組合の「目的」は協同組合共同体の建設によって実現される、と考えていたのであ

る。「目的を達成する方法」の順序はそのための段階を示しているのである。キングにとって重要なことは、いかにして「資本を蓄積するか」ということであり、したがって彼の協同組合論は「資本をどうすれば集められるか」ということを軸にして展開され、「資本の蓄積の可能性」を追求するところに特徴がある。先の「方法」を四段階に分けた理由もその点にある。<sup>(48)</sup>

加えて、キングの経済理論とは、当時の他の協同組合運動の理論的指導者たちと同様、「全労働収益権」を基礎に展開されているとされる<sup>(49)</sup>。そこで、着目すべきは、彼は資本それ自体を決して否定せず、むしろ資本は不可欠な要素であると捉える点である。その視点において、キングは「誰が資本を所有するのか」を問題と捉える。すなわち、「資本と労働」が分離し、一方に資本家が、他方に労働者が存在する社会にあっては、労働者は「自分自身のためではなく、他人のために労働」しなければならない。そのような状態の下では、「資本と労働」は対立し、資本(家)が労働(者)を支配するという非難すべき状況が生じるということである<sup>(50)</sup>。

要するに、労働者が「自分自身のために労働する」ためには、「資本と労働」を結合すればよいのであるが、現行の社会状態の下では、「資本と労働」の結合は、実は資本と労働の分離を前提としてのことなのである。それ故、肝要なことは、「労働から資本を分離しない」こと、すなわち、労働と資本との「自然的同盟」の関係を確立することが求められているとキングは唱えているのである<sup>(51)</sup>。すなわち、「自然的同盟」の成立に向かって、「労働者が孤立して活動する限り、彼らは自分たち自身のために労働することができない。というのは、そうするためには、彼らには資本が欠けているからである。しかし、もし多数の労働者が協同組合に共に参加するならば、彼らはやがて、彼らが現に親方の資本で親方のために労働しているのと同じように容易に、彼らの資本で自分たち自身のために労働できる資本を節約することが可能なのである」としている<sup>(52)</sup>。中川の考察によると、キングは、個人的にはなしえない労働者による「資本の所有」を、先に述べた「方法」に基づいて、集団的に実現しようとしたと理解できるものである。そして、キングは、資本主義的な「資本と労働」の関係を協同組合的な「資本と労働」の関係に置き換えることによって、全労働収益権を実現する。そして、労働者の貧困を救済し、さらに共同資本の形成による「独立」の達成を企図したということが分かるのである<sup>(53)</sup>。

## 第5項 ロッチデール公正先駆者組合の形成

店舗経営によって得られる利潤を分配することで店舗経営それ自体の「市民権」を確立するのは、オウエン主義的協同組合運動との関わりにおいては、ロッチデール公正先駆者組合(The Rochdale Society of Equitable Pinoneers)が最初である<sup>(54)</sup>。

1844年頃のロッチデールの状況は、綿工業と毛織物とりわけフランネルの織物工業の盛んな地であり、またマンチェスターに隣接する地勢から「小さな市場」を成していたとされる。当時の人口は約25000人、近隣に約40000人が住んでいた。1830年頃から主要産業のフランネル生産に動力織機が導入され、1840年頃には、動力織機の競争が激しくなっていく、手織機の職工たちは蒸気力との競争に生き残るための絶望的な闘争の渦中にあつたとされ、更にはフランネル産業自体も30年代から40年代を通してほとんど慢性的な不景気の状態にあつた。綿工業の状態もフランネルのそれと大差無かった。労働者は失業と賃金の引下げそして食糧価格の高騰の重圧に見舞われていたとされる<sup>(55)</sup>。

このような状況は「トラック・ショップ」や「トミー・ショップ」ロッチデールを生み出したのであつた。失業と低賃金のために、労働者の生活は困窮をきわめたが、その上に「トラック・ショップ」や「トミー・ショップ」を利用して雇主や小商人たちが貧しい労働者を収奪した<sup>(56)</sup>。「トラック・ショップ」や「トミー・ショップ」はまさに「貧しいが故に収奪される制度」であり、雇主や小商人の店舗で

彼らが供給する粗悪な必需品を法外な価格で購入することを労働者に強制するものであったと把握できる<sup>(57)</sup>。このような状況に対して、「オウエンがニュー・ラナーク工場の店舗で良質安価な必需品を自分の労働者に供給したのは、このような不法な収奪機構に対抗する開明的で博愛的な雇主としてであった」という実践がなされたのは大変有意義であった<sup>(58)</sup>。

ロッヂデールにおいても同様であり、ロッヂデールの労働者の中で様々な運動を起さずにはいなかったとされる。加えて、「ロッヂデールがマンチェスターとウエスト・ライディングとの間の交通にとっての一つの要衝であった」ことも、ロッヂデールの労働運動が活発であったことの大きな要因であったようである<sup>(59)</sup>。このような状況下で、19世紀前半において、労働者階級の活動の中心地としてロッヂデールが一步譲ったのは、マンチェスターとリーズだけであった」という指摘からも分かるように、ロッヂデールには、協同組合運動が展開される客観的条件と主体的条件が十分用意されていたと理解できる<sup>(60)</sup>。

その内実は、つまり「ロッヂデールの綿工業の労働者は、オウエン主義者 J・ドハーティーの指導する全国労働保護協会に参加していたし、チャーティスト運動の指導者 F・オコンナーはロッヂデールを何度となく訪れては演説した。また先駆者たちのうちジェームズ・スタンディングは 10 時間労働委員会の書記を務め、チャールズ・ハワースも 10 時間労働の闘争で活動していた。さらに反穀物法の運動でもロッヂデールは活発な地域であった」ということである<sup>(61)</sup>。これらの運動を担うグループの性質について、他のグループとの関係を鑑みながら、中川は次のように説明している。

これらの労働運動、すなわち、労働組合運動、チャーティスト運動、10 時間労働運動そして反穀物法運動は、整然と判別されていたわけではなく、各々のグループは排他的ではなかった。というのは、それらの運動は、その根底において、すべて同じ「ナイフとフォークの問題」を孕んでいたからである。「多くのオウエン主義者はチャーティストでもあれば急進的な選挙法改正論者でもあった」し、多くのチャーティストは穀物法の廃止を望んでいた。ロッヂデールではこれらの運動が交錯しながら展開されたのである。<sup>(62)</sup>

まさに、排他的ではないという性質は、運動を実践し、効果をあげるためには重要である。そして、それを可能にさせた同一の目的ということを先ず勘案する必要があるだろう。各々の理念や方法は異なっても、共通の目的のために運動を起こすということは、逆に、相互理解につながることを意味し、排他性を持つることのない「協同」への可能性を模索させたということができる。そして、これらの労働運動の下で、その運動は更に加速した。この過程は、『協同組合の思想と理論』において、以下のような詳細な説明を加えた上で、段階的に示されている。つまり、「このような労働運動の状況の下で、ロッヂデールでは賃金カットに反対するストライキが瀕発した。1842年のストライキは、結局敗北したのであるが、チャーティスト運動と結合して「政治ストライキ」の様相を呈した。このストライキで、先駆者の一人ジョージ・スコークロフトはロッヂデールのチャーティスト運動の議長として活動した」<sup>(63)</sup>と説明されるのである。続いて、以下のような具体的な紹介がされるのであった。

1842年のストライキに続いて、1844年に「地方の雇主を協定賃金等級に復帰させる」ための大ストライキが起った。ホリヨークが『ロッヂデールの先駆者たち』の中で、「ロッヂデール組合の起源はある織物工たちの賃上げ運動の失敗にまでさかのぼらなければならない」と述べたストライキである。ホリヨークは、このストライキに参加している織物工に、仕事に就いている他の織物工が週 2 ペンスを拠出し、それがストライキ参加者の生活を支えたのであるが、この「2 ペンスの拠出金」という考えこそ先駆者組合の「創業基金」創出のための「毎週の払込み金」という考えにつながった、と強調していると共に、このストライキによってひき起された窮迫こそが、1844年にジェームズ・スミーズでの議論を

発端とした重要な要因であったのである。<sup>(64)</sup>

続いて、『協同組合の思想と理論』は上に示される先駆者組合に先立つロッヂデールにおける協同組合運動に着目している<sup>(65)</sup>。その協同組合運動とは、1830年のロッヂデール友愛組合と、その組合を基礎に1833年に設立された「ロッヂデールでの最初の協同組合店舗」とされる「協同組合店」(Co-operative shop)である<sup>(66)</sup>。

1830年に設立されたロッヂデール友愛組合はフランネルを他の協同組合に供給する「協同組合工場」=生産組合であった。その組合は1830年に形成され、ロッヂデール友愛組合の名称を用いている。組合員は52名であり、基金総額は108ポンドである。組合は10名の組合員とその家族を雇用している。組合はフランネルを製造している。組合は蔵書として32冊を保有している。組合は学校をもっておらず、労働交換所の原理を討議していない。近辺には他に二組合があったとされる<sup>(67)</sup>。これらは「協同組合店は、いろいろな種類の食糧品を組合員に信用掛で供給し、顧客名簿にそれを記入した。つまり、協同組合店舗経営の崩壊の最大の原因であった掛売りを行なったのである。組合員の借金は週末に返済される規則になっていたが、借金は増えることはあっても減ることはほとんどなかった。返済は当然不履行となる。こうして1835年に協同組合店はドアを閉じたのであるが、やがてここでの失敗の経験は、設立者のハワースやスタンディングを通じて先駆者組合の運動に生かされる」<sup>(68)</sup>といったような展開を見せたのであった。

## 第2節 キリスト教社会主義の「協同」思想—中川雄一郎『キリスト教社会主義と協同組合』精読から

### 第1項 キリスト教社会主義者の誕生—モーリスの思想

市民社会批判を顕著な形で表現したオウエンの系譜と同じく、イギリスにおける協同組合の成立過程において重要な理想像や見識を提供したのが、キリスト教社会主義であった。

協同の思想を多分に含んだキリスト教社会主義思想をイギリスにて展開した人たちは、R・D・モーリス、J・M・ラドローそしてC・キングズリィであった。『協同組合の思想と理論』の著者、中川雄一郎の『キリスト教社会主義と協同組合』によると、彼らは「個人主義的で競争的な財産制度を協同的な社会主義的生産に取って代えようとした」という理念を掲げていた。しかし、それは「私有財産制度」を否定するものではなく、「社会のキリスト教的理想が存在する」ような「実現すべきキリストの王国」を目指す主張であった<sup>(69)</sup>。すなわち、それは「神の秩序は人々の相互の愛と同胞であることであるのに対し、私利私欲と競争は人間の無秩序の直接的な結果である」というのが彼らの基本的な立場であったからである。そしてモーリスはこう言明する。「私には、神の秩序はこれまでになく人間の制度の反対物のように思われる。それ故、私の考えでは、キリスト教社会主義は神の秩序を擁護するものである。…人間の社会は、相争う原子の集合体ではなく、多数の構成員から成る1つの組織体である。真の労働者は、相争う者ではなく、協力する労働者である。したがって、私利私欲の原理ではなく、正義の原理が交換を支配しなければならないのである」という引用からも分かる<sup>(70)</sup>。中川はキリスト教社会主義という名称表現と、その「物語の序説」について以下のように解説している。

モーリスは彼の若きグループに「キリスト教社会主義者」という名称を与えた。モーリスにとって、キリスト教社会主義の使命は「社会主義をキリスト教化し(christianising Socialism)、キリスト教を社会主義化すること(socialising Christianity)」であった。それ故、ラドローが1848年の2月革命の最中にあったパリからモーリスに宛てた手紙のなかで、この革命に「社会主義の将来」を見出すために、またこの革命が真にフランス人に祝福を与えるためには、「社会主義をキリスト教化すること」が必要である、と強調したのは当然のことであった。ラドローのこの手紙は、イギリス国教会を無神論以上のなにもものでもないと批判し、また民衆の目を神と社会主義に向けさせることが必要であると考えていたモーリスの同意するところとなった、モーリスとラドロー、この2人からキリスト教社会主義運動が始まったのである。<sup>(71)</sup>

自らのグループに「キリスト教社会主義者」の名称を与えたのはモーリスであった。キリスト教社会主義は「社会主義をキリスト教化し、キリスト教を社会主義化する」思想である、と宣言したのもモーリスであった。<sup>(72)</sup>

モーリスのキリスト教社会主義への意識とは以下のようなものであった。それは社会主義とキリスト教という別次元の存在をいかに融合させるかという点に帰している。それは、つまり、「社会主義」は本質的に教会の事業であって、国家の事業ではなかった、したがって、教会が存在するための基礎である「共産主義」を十全に機能させるためのモーリスが強調する「教会改革」(Church Reformation)は神学的にはカルヴィン教徒やオクスフォード運動者の限界と脆弱さとは別に、「社会的には、キリストの下では誰ひとりとして、どんな物も自分自身の物だと要求する権利はないが、精神的同胞愛(fellowship)と実地的な協同(co-operation)が存在する、現実には生きているコミュニティの真理を大衆に主張することを含んでいる」という構想として思考されたのであった<sup>(73)</sup>。その構想に向けての教会改革は、社会あるい

はコミュニティの真理である「同胞愛」(＝隣人愛)と「協同」が何であるかを大衆に知らせることであり、更には教会の基礎である「共産主義」は、実際の社会やコミュニティにおいては「社会主義」となるものとして、モーリスは認識していたのである<sup>(74)</sup>。中川は、モーリスが1849年にオウエン主義者たちの集会に出席した時の印象を記し、ラドローに送った手紙の内容を引用している。

私は、社会主義信奉者たちほどの、意志の力こそ状況を規制し支配するのだという強い確証を聞いたことがない。だが、共産主義は、いかなる意味においても、「新道德世界」(the New Moral World)の原理であるにせよ、旧世界のもっとも重要な原理であるということ、そしてあらゆる修道院施設は……あらゆる点で共産主義的施設であったということ、彼ら社会主義信奉者たちは知るべきであると私は思う。キリスト教共産主義の理念は、すべての時代においてもっとも力強く、生産的であるのだから、我々の時代において十分展開される運命にあるにちがいない。<sup>(75)</sup>

すなわち、モーリスは、「オウエン派社会主義者にキリスト教(精神)を教授することの必要性と教会改革(キリスト教共産主義)と現世の社会における改革(キリスト教社会主義)の継続性を説いた」<sup>(76)</sup>のである。ただし、モーリスは「社会主義の原理」は「社会における協同の原理」以上のことを意味しなかったとされている<sup>(77)</sup>。すなわち、それは「社会主義者のスローガンは協同である。反社会主義者のスローガンは競争である。協同の原理を競争のそれよりも強力であり、真の原理であると認める人は、社会主義者と称される名誉のあるいは不名誉かもしれない権利を存するのである」という引用からも理解できる<sup>(78)</sup>。

中川は、モーリスの社会主義は「社会における協同」に基づく「キリスト教社会主義」に他ならないと指摘する。更に、「モーリスにとって、「キリスト教的」(Christian)という限定形容詞は、社会主義の枠組みから彼自身を自由にさせるもの」であると捉えている<sup>(79)</sup>。加えて、P・R・アレンが、モーリスの「キリスト教社会主義は、実際には、キリスト教化された社会主義を、すなわち、キリスト教と明らかに両立し得る基本的な道徳的真理への社会主義の変形を意味したのである」<sup>(80)</sup>と表現したことから、別の観点からの興味深い指摘であるといえる。

## 第2項 キリスト教会改革運動とラドローの思想

ラドローは、キリスト教改革運動を社会改革の運動と結びつけることで、人々の実際的な関心を社会主義に近づけようとしたのであるが、彼の社会主義はキリスト教精神と本質的に調和する社会主義であることを要求している<sup>(81)</sup>。彼の社会主義は、「商業や工業に、労働者の生活全般に、アプローチしていく道が開かれる」ことが求められているのである<sup>(82)</sup>。この点について、中川はラドローの言説を引用する。「わが19世紀にあつては、キリスト教は、—その社会的影響力を剥ぎ取られた時に、換言すれば、社会主義から離れた時に、冷淡になり、無力化し、また教会あるいは礼拝堂の四方の壁の中に閉じ込められ、広い世間に出ていくことを禁じられた時に、—取引きと産業の全過程に対する、すなわち、我々の共同の生活の全活動に対する神の正当な支配を主張し得なくなった時に、冷淡になり、無力化するのである」<sup>(83)</sup>。

すなわち、このことが意味するのは「キリスト教が労働者と社会に対して影響力をもち続けるためには、キリスト教徒は、教会の内部に止まるのではなく、社会のあらゆる領域に、商業や他の産業にも労働者の生活全体にも関わっていくべきである」いうことであり、ラドローの確固とした表明でもある<sup>(84)</sup>。下記のように、中川はラドローの見解をより明確に紹介している。

ラドローにとって、キリスト教(精神)なしの社会主義は「生命のない社会主義」であるが、社会主義のないキリスト教は「生命のないキリスト教」でもある。現実の社会で苦悩している人たちにキリスト教徒は手を差し伸べてはじめて、キリスト教社会主義者になり得るのだとラドローは言うのである。要するに、ラドローは、「社会主義のキリスト教化」とは、現実の社会においては、「取引きと産業の全過程に対する、一共同の生活の全活動に対する神の正当な支配」に他ならないとして、キリスト教社会主義者が協同組合運動に関わっていく論理を準備したのである。かくして、ラドローはキリスト教会改革と協同組合運動(Associative Movement)を「時代の問題」と指摘して、両者を同一次元で扱うことを正当化し得たのである。<sup>(85)</sup>

これらの解釈とその問題性に関連して、ラドローが、『エディンバラ・レビュー』誌が彼らの運動を「共産主義的協同組合」(Communitistic Association)であるとみなしたことに反論した際の<sup>(86)</sup>、キリスト教社会主義運動の説明に着目したい。ラドローは、「精神的な事柄においては、共産主義は宗教生活のまさに戒律である。キリスト教のすべての天恵は、もっとも厳密に言えば、すべての人に『共通の』(common)ものである。すなわち、個別の部分やいくつかの部分に分けることが不可能なのである。…共産主義は依然として、普遍的であろうが部分的であろうが、我々の享受の戒律である」と述べたのであった<sup>(87)</sup>。すなわち、「ラドローは、共産主義は宗教生活の戒律であるだけでなく、享受の戒律でもあるのだから、共産主義という言葉を用いてキリスト教社会主義運動を論難してはならない、と主張しているのである」<sup>(88)</sup>。キリスト教社会主義者による協同組合運動は、共産主義的ではなく社会主義的であるとラドローは強調し、「共産主義はすべての社会主義の萌芽である」と述べているのである<sup>(89)</sup>。他方、マルクスの歴史観は、資本主義から社会主義へ、そして共産主義へという流れがあることから、ラドローの主張はマルクス主義とも距離を置いていることが分かる。これらに見る、共産主義という概念の位置付けについて、中川は以下のような見解を示している。

共産主義者という言葉は「物」(things)に関係するのに対して、社会主義者という言葉は「物」(persons)に関係する。「物は数人に共通(common)であるのに対して、人々は同胞(socii)であり、仲間(associates)であり、あるいはパートナー(partners)である。…共産主義は『物』から出発するので、絶対的財産に本来的に対立する。社会主義は『人間』から出発するので、人間の不和や不一致に本来的に対立する。かかるものこそ、実際、我々が目指すものなのである」。ラドローはここで、キリスト教社会主義は「物」からではなく「人間」から出発する社会主義であること、したがってまた、キリスト教社会主義運動は「同胞」や「仲間(組合員)」や「パートナー」といった、いわゆる「同胞愛」(fellowship)を基礎にした新しい社会秩序を打ち建てる運動であり、そのための手段として労働者生産協同組合を位置づけることを論じているのである。<sup>(90)</sup>

つまり、ラドローはキリスト教社会主義の起点を「人間」と捉えた。その人間とは「生き生きとした、そして自分の行動に責任を取ることのできる人間」である<sup>(91)</sup>。ラドローは、労働者をそのような「人間」として見ることによって、労働者生産協同組合を労働者の同胞愛や共同労働(fellow-work)に基礎をおいた組織であると考えたのであった<sup>(92)</sup>。中川はラドローからの引用を行う。それは以下のような言述である。「多くの点で我々自身のプロトタイプであるパリの労働者協同組合の組合員に、「あなたは共産主義者か」と尋ねてみたまえ。すると直ちに彼はこう答えるだろう。「いいえ。私は社会主義者である。」<sup>(93)</sup> 加えて、イギリスには自分たちのことを「社会主義者」と称する人たちがいるが、彼らこそ労働者の協同組合を設立した人たちか、あるいはそれを設立するのを援助してきた人たちなのである。<sup>(94)</sup>

ここに、社会主義と協同組合との結節を設けようとするラドローの意志が覗えるだろう。イギリスでは1840年代から50年代においてもなお、「社会主義昔」はオウエン派協同社会主義者を意味し、社会主義者を名乗ることは、オウエン主義が労働者階級への影響力を減じていようとも、その思想的、運動的な伝統は依然として労働者階級の人々の間に残っていたとされている<sup>(95)</sup>。つまり、それは「それ故、自ら社会主義者をもって任じることは、協同思想の擁護者として民衆の前に現われることであり、協同組合運動を実践することであったのである」<sup>(96)</sup>ということがいえるだろう。

### 第3項 協同組合運動とニール

ニールのキリスト教社会主義思想に目を向ける。キリスト教を基礎にした「社会主義の特殊な側面の擁護者」として現われたニールの社会主義に対する認識について、以下のような引用を見ることができる<sup>(97)</sup>。

社会主義一本質的にすべての人々がお互いに表現し合う同胞愛の感情である、しかし、同胞が同胞である所以は、1人の共通した親の子孫である、ということによってであるのだから、社会主義には、その自然的基礎として、すべての人々が神と関係している、という信念が存在しているのである。…他方、社会主義としては、すべての人々が個々に賦与された様々な能力を調和的に発達させていくのに必要なすべての機会を相互に保障し合うために、また我々が現世において存在していくために神の善が賦与してくれた喜びや楽しみを各人が十分に享受し得るよう保障するために、そして真の愛情が醸し出す、あの友愛的敬意をもって各人が行動するために、この関係を承認する人たちの方での真摯な努力を伴うのである。<sup>(98)</sup>

ニールは社会主義が「人々がお互いに表現し合う同胞愛の感情」であり、「その自然的基礎」は「人間が神と関係している」という信念を基本に据えているとされる<sup>(99)</sup>。つまり、人々が「人間と神との関係」を承認することであるという点が重視され、「社会主義を真に社会主義たらしめるためには、各人はそのもつ能力を調和的に発達させる機会と喜びや楽しみを享受する機会とをお互いに保障し合うことが必要であること、またその機会を保障するために各人はお互いに友愛の精神と敬意をもって行動すべし」<sup>(100)</sup>という思想がそこに含まれているといえる。ニールは、この「キリスト教」と「社会主義」を連結させ、神によってなされた人間の感情や行為の享受を保障する同胞愛を「社会主義」として捉えたのである<sup>(101)</sup>。

ニールは、「社会主義は、1つの理論として考察されるならば、社会全体の福祉を保障するために、人々が現世において相互に取り結ばなければならない諸関係の科学である、と定義され得る」と述べている。つまり、この解釈は、「社会主義は現実の社会における人と人との関係を、あるいは同じことであるが、人と人との社会的関係を客観的に考察する科学である」<sup>(102)</sup>という定義へと繋がるのである。しかし、この見解は、結局、キリスト教と社会主義とを分離することになり、「協同組合運動、労働者生産協同組合運動から神学論を切り離す立場に彼自身を立たせること」になるといえる<sup>(103)</sup>。ここに見るようなニールの立場について、中川は次のように説明している。

「キリスト教社会主義」についてのニールの見解や立場に矛盾があったことは確かである。彼は、一方で、社会主義を「人間と神との関係」を基礎として捉え、他方で、「人々がとり結ぶ社会的諸関係」を基礎として社会主義を捉えているからである。一方は「人間と神との関係」が、他方は「人間自身

の社会的関係」が社会主義の基礎となっている。一方の「社会主義」は「同胞愛の感情」であり、他方の「社会主義」は「科学」である。しかしながら、ニールにとって、この矛盾は矛盾として映らなかった。何故ならば、ニールからすれば、一方の「人間と神との関係」は一種の宗教的「信念」であって、仮にある人たちがその関係を承認しなくても、すなわち、そのような「信念」をもたなくても、社会主義は、そのような人たちも含めて、現にこの社会で労働し生活している人たちのために「福祉」を保障しなければならないからである。ただ、すべての人たちが「人間と神との関係」を承認するのであれば、各人の能力を発達させる機会や喜びと楽しみを享受する機会をお互いに保障し合うという行為が「友愛的敬意」をもって遂行されるだろうし、そうであれば、「社会全体の福祉の保障」はより容易に達成されるだろう、とニールは考えたのである。要するに、「人間と神との関係」の承認は、ニールの「社会主義」の不可欠の要素では絶対になかったのである。<sup>(104)</sup>

まさしく、ニールは、この「人間と神との関係」の承認に関する問題性が存在しているのである。ただし、ニールは協同組合運動に関して「科学としての社会主義」ということを重視していたのであった<sup>(105)</sup>。つまり、ニールは協同組合運動にキリスト教神学を導入させることはなかったのである。すなわち、この立場である限り、キリスト教社会主義運動が展開されている間、ニールが労働者生産協同組合と消費者協同組合を対等・平等に扱うよう主張、実践したということは、キリスト教神学論の協同組合運動への介入に基づき、労働者生産協同組合における「キリスト教的同胞愛の精神」の実現化を主張していたラドローへの批判であったと考えることができる。<sup>(106)</sup>

ニールが表明した、キリスト教社会主義の思想に従って社会を改革する際に「人間の精神生活に対する外部の社会機構の重要性」を認識しなければならないということの中には、「キリスト教社会主義」の「キリスト教的」部分を空疎なるものにしてしまう問題性を含んでいたといえる<sup>(107)</sup>。しかしながら、ニールはキリスト教社会主義についての独自の見解を道具として、ニールの「協同居住福祉論」<sup>(108)</sup>へと思考を展開させたのであった。

## 参考文献・出典引用

### 序

- (1) 岡本包治・山本恒夫編著『社会教育の理論と歴史』、第一法規、1979年、「コーヒーハウスの研究」263頁。
- (2) 同上。
- (3) 同、263-264頁。
- (4) 同、264頁。
- (5) 同上。コーヒーハウスの進展から見た際、この歴史的変遷については、引用書は文字通り社会教育への関連として解釈している。
- (6) 同上。
- (7) 同、265-266頁。

### 第1節 協同組合の構想と展開

- (1) 松村善四郎・中川雄一郎著『協同組合の思想と理論』、日本経済評論社、1985年、4頁。
- (2) 同上。
- (3) 同、5頁。
- (4) 同、6頁。
- (5) 同上。
- (6) 同上。
- (7) 同上。
- (8) 同上。
- (9) 同、7頁。
- (10) 同、6-7頁。
- (11) 同、8頁。
- (12) 同、8-9頁。
- (13) 同、9頁。
- (14) 同上。
- (15) 同上。
- (16) 同、9-10頁。
- (17) 同、10頁。
- (18) 同上。
- (19) 小柳公洋・桂木健次編著『市民社会の思想と運動』、ミネルヴァ書房、1985年、166頁。
- (20) 水田洋『社会主義思想史』、社会思想社、1971年、213頁。
- (21) オウエン『新社会観』(揚井訳)、岩波文庫、1954年。
- (22) 宮本憲一『現代居住論』有斐閣、1971年、56-57頁。上掲、『市民社会の思想と運動』167頁。
- (23) オウエン『ラナーク州への報告』(永井他訳)、未来社。上掲、『市民社会の思想と運動』167-168頁。
- (24) オウエン『オウエン自叙伝』(五島訳)、岩波文庫。
- (25) 上掲、『市民社会の思想と運動』168頁。
- (26) 同上。
- (27) ヴェネヴォロ『近代都市計画の起源』鹿島出版会、1976年、79頁。上掲、『市民社会の思想と運動』167頁。
- (28) 同、『市民社会の思想と運動』168頁。
- (29) 上掲、オウエン『ラナーク州への報告』、『オウエン自叙伝』。
- (30) 上掲、オウエン『新社会観』、78頁。
- (31) 上掲、『市民社会の思想と運動』169頁。
- (32) 同上。
- (33) 上掲、『協同組合の思想と理論』、24頁。
- (34) 同上。
- (35) 同上。
- (36) 同、27-28頁。
- (37) 同、28頁。(Owenism and the workingclass, Report of the Committee Appointed at a Meeting of Journeymen.)
- (38) 『協同組合の思想と理論』同上。
- (39) 同、28-29頁。
- (40) 同、29頁。
- (41) 同、31-32頁。(ロンドン協同組合)
- (42) 同、32頁。
- (43) 同、33頁。
- (44) 同、33-34頁。
- (45) 同、34頁。
- (46) 同、43-44頁。
- (47) 同、44頁。
- (48) 同、44-45、頁。
- (49) 同、47頁。
- (50) 同上。
- (51) 同上。
- (52) 同、47-48頁。
- (53) 同、48頁。
- (54) 同、55頁。

- (55) 同上。
- (56) 同、56 頁。
- (57) 同上。
- (58) 同上。
- (59) 同、56-57 頁。
- (60) 同、57 頁。
- (61) 同上。
- (62) 同上。
- (63) 同、57-58 頁。
- (64) 同、58 頁。
- (65) 同上。
- (66) 同、58-59 頁。
- (67) 同、59 頁。
- (68) 同、59-60 頁。

第2節 キリスト教社会主義の「協同」思想

- (69) 中川雄一郎『キリスト教社会主義と協同組合—E・V・ニールの共同居住福祉論』、日本経済評論社、2002年、21頁。
- (70) 同上。
- (71) 同、21-22頁。
- (72) 同、28頁。
- (73) 同上。
- (74) 同上。
- (75) 同、28-29頁。(Max, Beer, A history of British Socialism, with an Introduction by R.H. Tawney.)
- (76) 同、『キリスト教社会主義と協同組合』、29頁。
- (77) 同上。
- (78) 同上。
- (79) 同、29-30頁。
- (80) 同、30頁。
- (81) 同上。
- (82) 同上。
- (83) 同上。(J・M・Ludlow, Christian Socialism and its Opponents:1851)
- (84) 同、31頁。
- (85) 同上。
- (86) 同、33頁。
- (87) 同上。(J・M・Ludlow)
- (88) 同上。
- (89) 同、33-34頁。
- (90) 同、34頁。
- (91) 同上。
- (92) 同上。
- (93) 同、35頁。(J・M・Ludlow)
- (94) 同上。
- (95) 同上。
- (96) 同上。
- (97) 同、36頁。
- (98) 同上。(E.V. Neale, The Characteristic Features of Some of the Principal Systems of Socialism)
- (99) 同、『キリスト教社会主義と協同組合』、36頁。
- (100) 同、36-37頁。
- (101) 同、37頁。
- (102) 同上。(E.V. Neale.)
- (103) 同上。
- (104) 同、37-38頁。
- (105) 同、38頁。
- (106) 同上。
- (107) 同上。
- (108) 同、「協同組合運動と福祉—ニールの協同居住福祉思想」、231-261頁

論文査読

明治大学大学院政治経済学研究科教授 中川雄一郎

明治大学大学院政治経済学研究科准教授 生方 卓

研究会事務局・監修

熊谷地域労働者福祉協議会 田中初義

著者

山下祐樹（熊谷地域労働者福祉協議会）

地域社会研究論文1

「協同」思想の系譜と市民社会運動

—協同組合の構想とキリスト教社会主義の源流をめぐって—

平成27年2月15日発行（2015）

発行：熊谷地域労働者福祉協議会・地域社会研究会

事務局：熊谷地区労働組合協議会

（埼玉県熊谷市石原 1410-1）